新潟県長岡市　「希望が丘あそびの城」

希望が丘あそびの城ボランティア　　MSさん　　63歳

1. 活動の現況

2007年度から希望が丘「あそびの城」として、放課後子どもプランとは別に、独自の組織で子どもに遊びを提供してきた。現在、ボランティアの登録数が120～130人という規模で運営しているので、かなり大きな教室といえる。「あそびの城」の本部、運営委員会は長岡市の職員で構成されており、有償で業務を行っているが、その他の実行委員やボランティア等は完全に無償である。取り組みに参加するきっかけはほとんどが口コミという。

運営は行政主導のため、運営上の問題は特にない。スタッフも当番をボランティア表などでシフトを組んでおり、かなり組織化された教室といえる。

2. 放課後子ども教室との関わり

希望が丘コミュニティセンターを主な活動拠点としている「あそびの城」事業。そのコミュニティセンターの活動の企画・運営をMSさんは行ってきた。3年前、定年後にコミュニティセンター長から依頼され、現在までボランティアとして参加している。

日本棋院の囲碁クラブに所属しており、主に子どもたちに囲碁を教える先生として参加をしている。

3. 現在直面している問題

かなり大きな教室ということもあり、運営に際して予算が大きくかかってしまっている。

まだ、無償ボランティアが支えているので大丈夫というが、放課後子どもプラン等の今までやってきた事業が終わってしまうという心配がある。

「あそびの城」では、無償ボランティアは実は有償で、いくらか手当てが出ているのだが、そのお金をみんなで持ち寄って貯金し、いざ放課後事業による予算が取れなくなったときの備えにしているという。子どもの遊びを守りたいという強い願いを感じる。

4. 行政への要望

独自に内部でパソコン講習などの研修は行っているものの、子どもの指導方法や、具体的なプログラムなど、専門的な知識や具体策などの幅が広がらないという。関東では、そういった研修や講座が充実しており、様々な知識を得ようとすればいくらでもあるが、長岡ではそうはいかないという。

現在でも充分組織としてうまく機能しているが、時代の変化に対応することが問題である。子どもの言葉遣いや保護者世代の理解などは、都会に限ったことではない。しかし、それに対する議論や知識量が、絶対的に少ない地方では、苦労することが多い。

5. 聞取り者の感想

MSさんは長岡推進大学の学生でもあり、生涯学習にとても興味をもっていらっしゃる、はつらつとした方だった。お話によれば、ボランティア登録をされている120人近くの方も、子どもたちの放課後活動に熱心だという。

お話の中に、学校との連携があまりとれていないという問題があった。管理・運営を担当している人は情報があるが、ボランティアまで子どもの情報が下りてこないため、指導の際に戸惑うことがあるという。MSさんも、母子家庭の子どもに、「お父さんが喜ぶね」と声をかけてしまい、子どもを傷つけてしまったことがあるという。しかし、ボランティアの登録数も多く、個人情報の保護という面から考えれば、あまり情報をみだりに通知することはできないだろう。

学校との情報のやり取りや連携が必要というが、みだりに情報開示をするのも、考えなくてはならないと感じた。

（門間雅利）

新潟県「三条　つくしっ子クラブ」

月岡小学校　スタッフ　KSさん　64歳
西鱈田小学校　スタッフ　UAさん　72歳

1. 活動の現況

月岡小学校では、平成18年1月から活動を始め、週2回、水曜放課後と土曜の午前中に、小学校の校庭・体育館などで行っている。通常の活動のほかに季節に合わせたイベントも実施している。西鱈田小学校は、平成19年9月から活動を始め、毎週土曜日実施している。活動場所は、春～秋は屋外を中心に、冬は室内を中心に活動を行っている。

2. 世話焼きお母さんが支える子ども教室

月岡小学校のKSさんは、本事業に関わる前から、婦人会、社会教育委員会、体育指導委員、PTA役員、民生委員など、地域に関わるボランティア活動を積極的に行っている。三条市が本活動を立ち上げる平成17年7月に、教育委員会から協力の要請を受けた。活動の趣旨が、子どもだけでなくこれからの地域に重要な活動だと思い、自分の今まで培ってきた経験や、人脈を活用して三条市の活動の立ち上げに協力した。西鱈田小学校のUAさんも、以前からコミュニティ事業、コミュニティバスの運行（冬場）、還暦野球など様々な地域に関わる活動を行っており、その仲間も誘って活動に参加している。

3. 現場第一主義の行政との良好な関係

行政側の担当者は、定期的に活動を見学したり、各小学校のスタッフの担当日を決めたり、広報を行ったりと、現場の声に耳を傾け積極的に活動に関わっている。そのため、スタッフからの信頼も厚く不満はない。あえて言うのであれば、善意で行っており子どもから金銭以上のものをもらっているのだから、中途半端な謝金はいらないし、金銭でスタッフを集めて活動を運営するのであれば、もっと出してもらわないと割に合わない。もっと地域の力を信じて欲しいという要望であった。

4. 夫婦・親子で支えるつくしっ子クラブ

三条市では、自分たちの孫は同じ地域にはいなくても、自分たちの孫を育てるような気持で地域の子どもたちの放課後を支えている。KSさんは、初めは活動に乗り気でなかったご主人をも取り込み、今では夫婦で楽しく活動を支えている。思わぬ副産物として、夫婦で参加することで夫婦の会話も増えた。一方UAさんは、孫のいる小学校で活動をしているため、親子二代で活動を支えている。自分一人ではなく、家族も一緒になって活動を支えることが活動を楽しく長く続けるコツである。

5. 学童保育との良好な関係作りが課題

学童のほとんどの子どもがつくしっ子クラブに来ていても、学童の指導員は顔も見せない。また、子どもが受付で手続きをしないで学童に帰ってしまうときに、心配になり学童に確認しに行っても非協力的である。また、こちらはボランティアで学童は有給のスタッフということにも、不満ではないが少し釈然としない気持ちもある。今後学童との連携が今後大きな問題に発展するような気がして不安があるという。

6. “御義理”ではないスタッフの確保が急務

スタッフに関しては絶対数が不足している。毎月「つくしっ子クラブ通信」を月岡地区1500世帯に回覧板を通じて配布しているが、徐々に効果は出ているものの、まだ解決には至っていない。また、登録後、担当日も決めているのに無断欠席が続いている人が見られ、お付合いで登録はしたのに、日を追うごとにいなくなってしまう人がいる。そのため、スタッフが足りず活動場所が限られたり、一部のスタッフに負担が偏ったりして困っている。ボランティアであるため、参加を強制することもできないが、大人として最低限の礼儀をもって参加して欲しいという。また、PTAとの協力も極めて少なく、送迎するだけで自分の子どもにしか興味がないのか、スタッフ任せの保護者が多くみられることも課題である。「子ども」という共通のキーワードを通じて、価値観も共有しなくてはと感じている。

7. 子どもの居場所は親の居場所・地域の居場所

この活動は、子どもたちの居場所としてだけではなく親の教育の場でもある。今は、親が自信を持って子育てを出来ない時代であり、それを地域で支えていく必要性がある。地域の人が本活動に関わることで、大上段に構えて「教育」ではなく、親の見つけられない子の姿を見つけてアドバイスできることが魅力である。また、子どもたちがストレスを多く抱えているため、この活動を通じて変化して欲しい。さらに、地域の人にとっても、子どもたちと一緒になって遊ぶことで体力がつくこと、家族で共通の話題が出来ること、地域の顔見知りが増えて地域の安全にもつながっていることなど、少ない謝礼以上に得るものの多い重要な活動である。

8. 聞取り者の感想

三条市の特徴は、地域の顔役が中心になって、人脈を駆使しスタッフを集め運営しており、地域に根付いた活動になっている。家族ぐるみで活動を支えており、特定の誰かがということではなく、世代を越えてみんなで子どもたちを育む姿勢がある。一方で、他の地域と同じように「一部の物好きがしている活動」ととらえられている側面もある。協力的なスタッフの確保も大きな問題であり、今後さらに地域へ参加を呼びかけたり、保護者に活動について知ってもらう必要がある。保護者が中心で進めていたり、謝金をもらって仕事として行っている地域もあることに関しては、仕事を休んでまで保護者がする意味はないし、親ではない違う目が入ることがこの活動にとっては重要であるという認識である。地域で今まで活躍してきた人材を有効に活用し、行政と連携した活動として今後も注目していきたい。

（大瀧景子）

3 行政主導によるボランティア育成

事業名
尼崎市「こどもクラブ」

実施主体のプロフィール	
実施主体の名称	尼崎市教育委員会社会教育部児童課
住　所	〒661-8501 兵庫県尼崎市 東七松町1丁目23番1号
連絡先	☎06-6429-3042

1.尼崎市の放課後子ども教室の概要

尼崎市は、平成15年度からそれまで、市内12ヶ所に存在した児童館を廃止し、市内43ヵ所にある小学校の全校で、学校の空き教室等を利用して放課後子ども教室を本格的に開始した。尼崎市は、放課後子ども教室としての「こどもクラブ」と、学童保育の「児童ホーム」を同じ小学校敷地内で実施する形態をとっている。いずれも所管は、教育委員会が担っている。

放課後子ども教室の運営は、各施設に有資格嘱託職員（責任者）を配置し、さらに有資格の臨時職員1名、無資格臨時職員2名の計4名のスタッフを各教室に配置している。日常の運営は、臨時職員の3名がローテンションを組み、教室に配置される職員は常時3名となっている。

市の年間経費は、人権費を除き約24,000千円である。人権費は、有資格嘱託職員が約170,000千円、臨時職員が約60,000千円である。

尼崎市はさらに無償のボランティア（読み聞かせ）によって、全教室で月1回の読み聞かせを実施している。無償の読み聞かせボランティアも、市のボランティア養成講座によって育成された市民であり、講座修了者を主体とする全市的なボランティア団体を組織化している。

2.尼崎市の放課後子ども教室の活動支援スタッフの特徴

尼崎市の放課後子ども教室を活動を支援するスタッフの特徴を端的に述べれば、行政主導によるボランティア養成と捉えることが可能であろう。

尼崎市では各小学校の責任者を担う有資格嘱託職員、及び臨時職員は、全て市の公募・選抜を経て採用される市民である。行政は職員の採用後も、有資格職員と無資格職員を分けて、年4回の市全体の研修会を実施する。さらに、職員同士のブロック別研修や学校別研修の機会もある。

無償ボランティアについても、市の実施する読み聞かせボランティア養成講座を修了した受講生が全市的なボランティア組織のメンバーとして集っている。市民は、講座の受講によって得た知識・技能を活用し、放課後子ども教室の活動支援を行っている。行政側の仕掛けたボランティア養成事業が、望ましい形で放課後子ども教室の活動支援に繋がっている好例と言えよう。

安全で楽しいこどもの居場所

こどもクラブ　Q&A

こどもクラブは、お子さまにとって安心して過ごせる場と、異年齢が交流する場を提供することを目的にスタートした地域での放課後のさかり取組みです。

お子さまたちが、明るく・のびのびと心豊かに育つためには、お子さまを中心に保護者や地域の皆さま方と行政が協働して見守り様々な体験の場をつくることが重要です。ただし、この事業は学校の課業ではありません。

Q1　こどもクラブってどんなところ？？
こどもクラブは、1年生から6年生まで、月曜日から土曜日まで、また、春・夏・冬休み等にだれでも遊べるところです。
保護者のみなさまも、大歓迎。お子さまと一緒に遊びにきてください！！

Q2　初めて行くときは、どうすればいいの？？
保護者が「こどもクラブ」の申込書に記入し、こどもクラブの指導員に渡してください。参加カードを発行します。申込期間は、こどもクラブにあります。申込みは、毎年必要です。
同時にスポーツ安全保険に加入していただくようにお願いします。

Q3　参加カードってなに？？
参加カードは、家庭とこどもクラブを結ぶ大事なカードです。
必ず持参時は、保護者が記入してください。

Q4　誰が来てもいいの？？
学内に住んでいる小学生なら誰でも参加することができます。
中学生以上は「サポーター」というみんなのリーダーとして参加できます。
土曜日や春・夏・冬休み期間は、幼児も、保護者または成人の同伴で参加できます。

Q5　大人も参加できるの？？
初めにお子さまと一緒に参加してください。大人の方は指導員に声をかけていただいてから参加してください。
ボランティア登録も受け付けています。

Q6　何時から？？
こどもクラブでは原則として月～金は、午後1時から各学校の下校時刻までです。土曜日・夏休み等は午前9時から12時と、午後1時から各学校の下校時刻まで開いています。
お子さまの帰宅時刻は保護者が指定して、必ず保護者が帰宅時刻を記入した参加カードを持たせてください。

Q7　こどもクラブにお休みはあるの？？
日曜日、祝日、年末・年始はお休みです。

Q8　どんなことをするの？？
連絡帳や伝言掲示でドッジボール・ゲームなどにつこと、折り紙、絵手紙などで遊びます。クラブ室では、オセロ、将棋、百人一首、トランプ、ぬり絵等をして遊びます。

Q9　参加費はいるの？？
無料です。
でも、手作り工作などでは材料費等がいることもあります。

Q10　のどが渇いたらどうするの？？
こどもクラブでは水筒の用意をしていません。
夏は特に、大きな目の水筒にたっぷりの麦茶を入れて持たせてください。ジュース等は禁止しています。

Q11　お昼ご飯はどうするの？？
土曜日や夏休み等は、12時には家に帰ってご飯を食べます。

Q12　自転車は乗ってきていいの？？
自転車は禁止です。歩いてきてください。

Q13　おやつは持ってきていいの？？
学校の休憩などに限りクラブ室の中で時間を決めて食べますので、10分くらいで食べられる量を持たせてください。冷蔵庫は使えないので冷やすプリンやゼリーなどはだめです。

Q14　保険は義務？？
元気が安心して遊べるよう　できる限り入ってください。
保険料は年度1人500円で、保険は入金の翌日から適用されます。指導日数1日以上の保険が対象になります。

Q15　児童の安全管理についてどうなってるの？？
安全に対して万全の注意を払って指導を行いますが、お子さま本人の不注意によるけがや事故、天災等不測の事態に対して責任を負うことができない場合があります。
こどもクラブの行き帰り等については保護者の責任において参加されていただきますよう安全に対するご配慮・ご指導をよろしくお願いします。

この事業についてのご質問やご意見は、こどもクラブまたは施設課までお問い合わせください。
施設課　TEL：6429－3042
FAX：6429－1811
こどもクラブ
TEL・FAX

子どもの豊かな読書環境の推進を目指す読み聞かせボランティア

KKさん　　61歳

1. 活動の現況

KKさんは、現在、月に1回、尼崎市内にある43箇所のこどもクラブで読み聞かせのおはなし会を実施する「尼埼こどもと本をつなぐ会」のボランティア団体の代表者であり、かつ実際に子ども達に読み聞かせを行うボランティア活動者である。このボランティア組織は、尼崎市図書館が実施したボランティア養成講座の修了者によって組織化された団体である。平成18年5月にボランティア組織が立ちあがり、同年9月より尼崎こどもクラブでの月1回の読み聞かせを実施してきている。

「尼埼こどもと本をつなぐ会」は、組織を立ち上げた当初の平成18年度内は、市内約20箇所のこどもクラブでの読み聞かせを行ったが、その後、平成19年4月以降は、市内全43箇所のこどもクラブで読み聞かせを行っている。平成20年度現在、ボランティア組織の登録者は77人にのぼっている。

活動は月に1度、午後3時から30分～50分程度の読み聞かせを行う。各学校別に1名の地域リーダを配置し、回毎に1～5名のメンバーが担当する。選書は、学校別に担当メンバーが行う。なお、学童保育の児童も、希望があれば一緒に読み聞かせへの参加を認めているとのことであった。なお活動者に対する読み聞かせの謝金は、無料である。基本的にメンバーが歩いて行ける場所の学校に赴き活動を行っており、無償であることに対し、KKさんはじめボランティアメンバーからの異論はないとのことであった。

2. 子ども放課後教室とのかかわり

KKさんは、平成8年に放課後子ども教室の読み聞かせのボランティア組織を立ち上げる前に、平成3年からボランティア・グループ「ペガサス」を組織した。この団体は、本無しでお話を聞かせる、ストーリーテリングを行うボランティア団体である。これまでに公民館、障害福祉施設、小学校、地域の子ども会、シルバーセンター等でのおはなし会を行ってきた。　しかし従来のボランティア団体「ペガサス」では要求の全てに応えきれない状態となり、全市的なボランティア団体の立ち上げの必要性を認識し、「尼埼こどもと本をつなぐ会」を立ち上げに至った。

KKさんが携わる読み聞かせのボランティア活動は、全てその発端が市立中央図書館における読み聞かせボランティア養成講座にある。即ち、講座修了者が集まり、放課後子ども教室の読み聞かせを行うボランティア団体の組織化に繋がった。現在も、市の読み聞かせボランティア養成講座は、市内6箇所で継続的に実施されている。そうした市のボランティア養成講座の取り組みが、放課後子ども教室の活動支援を行う市民団体の育成に繋がっている。

これまでの直面した問題と問題解決の経緯について

KKさんがこれまでの活動で直面した問題の中で、特に大きなものは放課後こどもクラブを支援する読み聞かせの新たなボランティア組織の立ち上げにあったとのことである。即ち、全市的なボランティア団体を新たに組織化しようとする際に、困難が伴った。

当初は、既存のいくつかの読み聞かせを行うボランティア団体をまとめようと試みたが、グループ間の交流は消極的で新たな組織づくりはうまく進展しなかった。そこで、既存のグループ間交流という発想を改め、全市的なボランティア団体の活動の趣旨に賛同する方々を個人レベルで募集した。賛同者からは組織の趣旨に対する同意書をご提出頂き、現在の全市的な新たなボランティア団体の組織化が成功した。なお各メンバーの在住する地域性を考慮した活動を重視した点も、新たな組織の立ち上げの際に重要なポイントであったとKKさんは感じている。

3. 今後の子ども放課後活動への要望

KKさんの関わるボランティア団体は、これまで様々な活動支援の資金援助も得て約200冊程度の児童書の購入を行ってきたが、子ども達により多様で豊かな読書環境を準備するには書籍数は十分ではないと認識している。国や都道府県、市町村教育委員会には、書籍購入及び、スタッフ研修のための財政的支援を希望している。

市立図書館に対しては、現在も書籍の団体貸出を行って頂き協力を得ているが、今後例えば、貸出期間を延長して3カ月間100冊を可能とすれば、43校のこどもクラブの全てに貸し出した書籍を回すことも可能となるため、さらなる団体貸出のルールの見直しなどを検討して欲しいと期待している。

なお、こどもクラブによっては、読み聞かせによる児童の読書推進の意義を十分に理解していない指導員も見受けられる。従って市側には、読み聞かせボランティア活動の意義について、日頃、子どもクラブで児童の指導・助言にあたる活動支援者の指導員への周知徹底を行って欲しいと願っている。

4. 聞取り者の感想

KKさんは、尼埼市のこどもクラブの読み聞かせボランティア団体の立ち上げから、組織のスムーズな運営を図るための様々な努力を重ねていらした指導的立場を担う市民である。こども達のために、優れた読書環境の整備を願う気持ちは強く、これまでにもボランティア団体が独自に優れた児童書を購入するための資金調達や購入活動に取り組んできた。こどもクラブの指導員からの評価は総じて高い。

しかし、一方で、KKさん自身が認識されているように、児童への読み聞かせの意義を十分に理解していない指導員もいるとのことである。行政側はボランティア団体の活動支援の一環として、指導員への理解促進を図る研修や周知徹底に努めるべきであろう。さらに、図書購入の財政的支援や、市立図書館の団体貸出の弾力化も、今後の検討課題であると言えよう。

（金藤ふゆ子）

有資格嘱託職員として学校、家庭、地域をつなぐ

MYさん　　62歳

1. 活動の現況

MYさんは、現在、こどもクラブの有資格嘱託職員であり、かつ尼崎市内のあるこどもクラブの責任者として平成20年から勤務している。勤務形態は1週間5日の勤務であり、勤務時間は平日の場合午後1時～5時、土曜日や学校休業日の場合午前9時～12時、午後1時～5時までで、1か月のトータルの勤務時間数は約120時間程度である。MYさんは、こどもクラブに勤務する以前は、平成18年度まで専任の小学校教諭としての勤務経験がある。平成20年4月より現在のこどもクラブの責任者としての勤務を開始している。

活動内容は、放課後の児童の自由遊びや集団遊び、学習指導の他、製作活動の支援、地域との連携（母親クラブや登録ボランティア等）があり、さらに安全管理として安全管理員の配置、安全点検、遊具の正しい使用の指導、不審者への対応などの活動など多岐にわたっている。MYさんの上記の放課後子ども教室の責任者としての給与は、月19万円強である。

2. 子ども放課後教室とのかかわり

MYさんは、退職後、平成19年2月頃の月1度の市の広報誌で放課後子ども教室のスタッフの募集を知った。また、友人等からの話で、尼崎こどもクラブのことを知り、応募することとした。

これまでの長年の教員として勤務経験を有していることから、こどもクラブの活動に対するMYさんの理解は深い。またMYさんは、教職経験のみではなく、全日本カウンセラー2級資格を有することから、ボランティアで個別に相談にのる活動にも着手してきた。そうした長年の経験等があったために、放課後子ども教室の活動にスムーズに移行できたと考えられる。

3. これまでに直面した問題と問題克服の経緯について

山下さんが直面する課題の一つとして、現在も取り組む、特別支援教育を必要とする児童への対応がある。平成20年4月より、特別支援を必要とする児童がこどもクラブに参加するようになっている。様々な問題解決にあたっては、学校、家庭、行政が十分に話し合いを行い、双方にとってできる範囲・程度に応じた協力体制づくりが重要である。また諸問題に対する、建設的姿勢が鍵を握るという。現在も問題や支障が生じれば、その都度、話し合いを行っているという。

4. 今後の子ども放課後活動への要望

MYさんは上記のように多様な特性を持つ児童の受け入れを行っており、それが現在の大きな課題ともなっている。行政側には、こどもクラブの施設が、バリアフリーになっていないといったハード面の整備の手当を希望している。さらにスタッフの人的面においても、人員確保や専門的知識・技能を習得するための専門的研修機会を今後さらに拡充する必要があり、その対応を行政側に期待している。その対応には当然ながら、国や都道府県教育委員会、市町村教育委員会からの予算増額も必要であろう。

さらに児童を預ける保護者の中には、全て子供任せで参加カードの確認・点検を行わない者も見受けられるという。保護者に児童に対する関心をもっと持って頂きたいケースがあるという。

5. 聞取り者の感想

MYさんは、学校での長年にわたる教職経験により、学校の諸状況への理解が深く、また行政や保護者との話し合いを進めるコミュニケーション力においても優れた力量をお持ちであるとお見受けした。現在、まだ解決されていない施設のハード面の整備や、スタッフへの専門的研修機会の充実など、行政の取り組むべき課題についても期待は大きい。

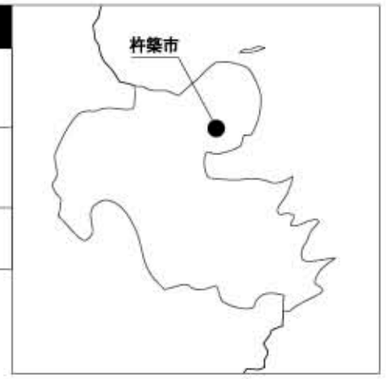
MYさんのこれまでの教職経験や、カウンセリングを大学院で専門的に学ばれた経験が、放課後子ども教室の子どもたちを暖かく見守る素地になっていると感じる。今後行政は、MYさんのような放課後こども教室の現場の声により耳を傾け、必要な処置や対策を早急にとって頂きたいと思う。

（金藤ふゆ子）

4 NPOと行政の協働による運営

事業名
杵築市「放課後子ども教室　にっこ・にこ教室」

実施主体のプロフィール	
実施主体の名称	大分県杵築市教育委員会 山香中央公民館
住　所	〒879-1307　大分県杵築市山香町 大字野原1670　山香中央公民館
連絡先	☎0977-75-0040



1.「にっこ・にこ教室」の概要

杵築市では、文部科学省の「放課後子ども教室推進事業」を受け、平成19年度から放課後子ども教室を、市内3カ所（杵築、山香、大田）で実施している。

運営体制は、杵築市教育委員会の中に「杵築市放課後子どもプラン運営協議会」を設置し、運営が行われている。杵築市教育委員会の教育長が会長を務め、協議会で全体総括的な事をまとめている。

「にっこ・にこ教室」は、山香地域の事業として実施している放課後子ども教室推進事業の名称で、地元の有志で設立したNPO法人と行政が協働で実施していることから、多様な人材による多様なプログラム展開が魅力的なところである。

今年度の登録者は、140名（小学1年～6年生）の参加で、山香地区6カ所で小学校の余裕教室を利用して事業が実施されている。

2.「にっこ・にこ教室」の実際

（1）プログラム

「にっこ・にこ」教室

期間　平成20年5月～平成21年2月

※各小学校区（6校区）毎週1回実施（年間35回／1校区）

【1日の基本スケジュール】

学校終了後（放課後）～宿題及び自由活動（見守り安全管理員の配置）
※低学年の児童が中心

午後4時～5時　高学年の合流（学習アドバイザーの配置）
地域交流をふまえた教室の実施
※工作、軽スポーツ、科学、昔の遊び、野外体験等

午後5時～　下校開始（宿題や自由活動）
午後6時まで見守りの継続実施

地域のボランティアに多く協力してもらいながら、見守り、学習指導や教室を実施している。また、週替わりでの教室になるため、周辺部の児童にとっては、貴重な体験活動の場になっている。

（2）指導者

運営は、「NPO法人子どもサポートにっこ・にこ」と協働で実施している。そのNPO法人のスタッフを中心に、地域有志ボランティア等へ事業趣旨を理解してもらい、事業への参加と協力を依頼した。その結果、多くのボランティアにサポートしてもらい事業を実施している。

〔指導スタッフ〕

公民館職員、NPO法人スタッフ、放課後子どもプランコーディネーター、地域有志ボランティア

〔ボランティア〕

学習指導ボランティア、退職教職員、NPO、高齢者ボランティア講座受講生、地域有志ボランティア

〔安全見守りボランティア〕

老人クラブ、各種女性団体、NPO、地域有志ボランティア

※ ボランティア協力者数　約130名

このように、「にっこ・にこ教室」では、多くの有志の協力の下事業が実施されている。

その背景には、NPO法人と行政の密着した取り組みの結果が、約130名もの、地域有志ボランティアの参加へとつながって行った。

その様なことから、山香地区の事業は、NPOと行政の協働による事業運営の例としてあげることができる。

行政とのパイプ役として携わる
大分県杵築市　「にっこ・にこ教室」

NPO法人こどもサポートにっこ・にこ　　OTさん　　58歳

1. 活動の現況

OTさんは、地域の親御さんたちと学童クラブを立ち上げ、それを「NPO法人こどもサポートにっこ・にこ」として設立し、地域における子どもに関わることを全面サポートしている。

特に、NPOを含め地域での活動に携わっている人たちをコーディネートしたり、行政を含む全てのパイプ役的な仕事を行っているようで、自身のスキルアップのために、社会教育のセミナー等にも積極的に参加している。

「にっこ・にこ教室」には、NPO法人のスタッフとして携わっており、ほぼ毎日各教室をまわり、様々な活動の状況を把握し、行政と教室スタッフのパイプ役として活動している。報酬は、市立の幼稚園教諭として得ているため、教室はボランティアとして参加している。

2. にっこ・にこ教室とのかかわり

OTさんは、幼稚園教諭として、平成11年度から「にっこ・にこ教室」に関わっている。活動当初は、学童クラブの事業として実施してきた教室だが、平成16年度からは行政と協働で実施している。

自身の学習活動も活発で、茶道など様々な習い事をしてきた。その中で、人を知り、人との関わりの大切さが真にわかるようになった。そんな時に、子どもの声に、自分の小さな役割を見つけ、現在に至っていると話していた。

本を好きになる魔法の教室や地域のお祭りなどを計画することにより、そこに参加してくる子どもたちや大人たちが真剣な目で取り組む姿をみて、充実感を感じると言う。

3. 現在直面している問題

活動上の問題については、発生したらその都度すぐに解決するようにしている。

現場に携わっている人たちは、現状を把握しており、それぞれの立場で活動を行っているが、人事異動により担当者と地域住民とのギャップがうまれるため、担当者への事業の基本研修が必要と感じているようだ。

また、事業実施にはNPO法人の役割が大きいと感じているが、地域でのNPOへの理解が薄く、ボランティアのお願いに行っても話を聞いてくれないことがある。

事業を実施するためには、資金面は大変であり、行政との協働はとても大切である。協働をとおして、地域の力は大きくなってきたが、市町村合併による地域差は隠すことができない。さらに、国からおりてきた事業であるため、事業によって、ボランティアの有償や無償があり、せっかくネットワークができつつあるところに、問題が生じている。有償ボランティアの位置づけは、高齢者にとって大変喜ばれており、その力が事業実施に大きく貢献しているところから、お金については行政側で全体把握をして調整してほしいと話をしていた。

4. 聞取り者の感想

OTさんからは、何か大きなオーラを感じさせられた。

地域で子どもたちを育てていくという信念は、地域の誰にも負けないものがあり、それがNPO設立に動いたのではないかと思う。

教室を運営していく中で、行政側の取り組みが大きなキーワードであることを感じた。そのためには、担当者が事業に対する理解と、学びをもっと積極的に行ってほしいとOTさんは、話をしていた。

行政側が、もっと学校や先生方への意識を広げる言葉掛けをしてくれれば、もっとこの事業は大きく広がっていくのではないだろうか。

最後に、OTさんの言った言葉で、ボランティアとして参加してくれる方へ「あなたにできないことは何もない。共に学び共に楽しみましょう」というメッセージは、大きな意味があると感じた。

（小野寺　蔵）

全体コーディネーターとして携わる
大分県杵築市　「にっこ・にこ教室」

NPO法人こどもサポートにっこ・にこ　TSさん　43歳

1. 活動の現況

TSさんは、現在「NPO法人こどもサポートにっこ・にこ」のスタッフとして、教室に携わっている。

「にっこ・にこ教室」は、杵築市山香町の各小学校（6校）で実施されている。15時ころから子どもたちは集まってきて、まずは宿題をするそうです。終わった子どもは自由遊びをして過ごします。全学年がそろう16時から教室が始まり、約1時間の実施と言うことです。

TSさんは、6校のまとめ役として全体コーディネーターを行っており、プログラムの企画から教室の準備までを担当している。また、学習アドバイザーとして直接子どもたちへの指導も3校で担当している。週3日、15時～18時までの4時間教室に携わり、報酬としては一回あたり千円程度支給されている。

2. にっこ・にこ教室とのかかわり

TSさんは、公民館職員からの要請を受けて、平成19年度からコーディネーターとして活動に携わっている。自身は、以前様々なサークルに参加をしていたが、それもほとんど参加しなくなってきていた。しかし、この教室に参加していることで、子どもたちとのふれ合いを通じて、もっと自身に様々な経験や学びが必要と感じて、以前以上に活発に学びの機会を増やしているとのこと。

この教室の関わりが、自身のスキルアップにもつながっていると話をしていた。

3. 現在直面している問題

活動場所が広範囲に広がっているため、スタッフやボランティアなどみんな揃っての打合せや反省などを話し合う時間がとれない。

また、行政側も人事異動で全ての担当者が変わってしまった。今までの経緯を知らない方が担当になったため、新しい取り組みを行うと言うより、今までの事業を理解してもらうために時間が係ってしまった。

さらに、教室時間が1時間と限られている中、プログラム内容の充実を図ることは大変な部分が多く、苦労の毎日であるということであった。

活動を実施する学校には、よく理解してもらい積極的に対応をしてもらっているが、学校内に窓口となる担当者がいないのが現状で、欲を言えば学校内に社会教育的活動の窓口となってくれる係の人がいてくれるとよいと望んでいた。

いろいろ課題はあるが、この教室の意義は大きく、教室を充実していくためにも、適確な評価や指導を繰り返しながら進めていく体制づくりが、行政とNPOの間で必要と感じているようです。

4. 聞取り者の感想

TSさんは、様々なご意見を持ち、この教室をもっともっと良いものにしていきたいという思いが、お話をお伺いして大きく感じてきた。

特にボランティアの確保には悩んでいるようで、広くたくさんの団体の方にもっともっと参加してもらいたいため声を掛けると、それまで参加してくれていたボランティアの方々、特に高齢者の方は一歩譲ってしまうところがあり、地域によって呼びかけが難しいと言うことを悩んでいました。

教室を運営していくためには、多くのボランティアの方々の協力が必要なため、行政が広く住民に事業を理解してもらう活動を行っていく必要があるのではないかと感じた。

また、行政側もしっかりと事業内容を学び、現場の声を聞いて、事業に携わる全ての関係者の共通理解のもと、地域全体で取り組んでいくことが必要であると感じた。

（小野寺　蔵）

5 学校と地域団体のパートナーシップ

事業名
那覇市立若狭小学校「若狭小ふれあい教室」

実施主体のプロフィール	
実施主体の名称	那覇市立若狭小学校
住　所	〒900-0031 沖縄県那覇市 若狭2丁目16番1号
連絡先	☎098-891-3312

1.那覇市立若狭小学校の特色

那覇市立若狭小学校は、昭和32年1月に開校されており、開校以来50年を迎える歴史と伝統に培われた学校であり、全校14学級、児童数450名（平成20年3月1日現在）の中規模校であり、学校経営目標として「明るく、楽しく、美しい学校」を掲げ、そのための具体的目標を「地域に開かれた学校」、「分かる授業を創造する学校」、「安心して過ごせる学校」としている。

特に「地域に開かれた学校」では・児童・教師・親が信頼しあう学校、・学校・家庭・地域が連携しあう学校、・地域の良さが生かされる学校を具体的内容として示し、地域全体で「若狭っ子」を育む「地域の学校」づくりを推進しており、学校と地域の結びつきが大変強い。地区内には、若狭公民館、若狭図書館、若狭児童館が設置されており、これらの施設とも効果的な連携が図れる環境にある。

2.「若狭小ふれあい教室」の特色

平成18年度に、「若狭小ふれあい教室」が設置され、毎週火曜日から金曜日の4日間、6教室の活動が実施された。教室の実施にあたっては、若狭公民館・図書館との連携が重要な役割を果たした。平成19年度からは、同小学校内で実施されていた「若狭児童（学童）クラブ」と連携し、「放課後子どもプラン」として新たな枠組みの中でスタートすることになり、活動も月曜日から金曜日の5日間で実施されるなど、より継続・充実した子どもの居場所づくりが進められることになった。

活動プログラムも、平成19年度からは、「読み聞かせ」「折り紙」「英語教室」等6教室に、「学習支援」「大正琴」等を加え、7教室のプログラムが設けられるなど、活動内容の充実が図られており、平成20年度も引き続き同様のプログラムで活動が行われている。

3.「若狭小ふれあい教室」の活動支援スタッフの特徴

活動支援スタッフは、同校に置かれる「地域コーディネーター」である教頭が指導スタッフの依頼を行っており、主には各地域団体が中心となって担っている。

具体的には、月・火・木曜日が「若狭児童クラブ」専任指導員、水曜日が体育指導員、木曜日が地域民生委員、金曜日が地域支援者（ボランティア）となっている。

特に、「若狭児童クラブ」が担当する月・火・木曜日は、3名の専任指導員がふれあい教室の参加者と児童クラブの参加者を同一のプログラムで一体的に指導しており、木曜日を担当する地域民生委員は、「那覇第2民生委員協議会」が主体となり、指導に当たる民生委員のコーディネートを行ったり、「大正琴」のプログラムにおいて積極的に公民館事業と連携するなどふれあい教室事業の拡大・充実に大きな役割を果たしている。

このように「若狭小ふれあい教室」の指導スタッフの特徴を見てみると、地域民生委員、体育指導員、学童クラブ専任指導員等地域で活動する様々な団体が中心となって活動していることから「地域団体連携型」として捉えることができる。

安全管理員として子どもを見守る

KSさん　　55歳

1. 活動の現況

「若狭小学校ふれあい教室」は、現在若狭小学校の余裕教室において週5日間（月曜日「学習支援」、火曜日「花づくり」、水曜日「昔遊び」、木曜日「フィールドゲーム」、金曜日「大正琴」「ビオガーデン」）開催されている。

KJさんは、このふれあい教室で毎週金曜日の15時30分～16:30分の間に開かれている「大正琴教室」の安全管理員として、平成19年度から学習アドバイザー、ボランティアの人たちと共に週一回、主に活動記録簿の整理等に携わっている。なお、子どもたちに大正琴を指導する学習アドバイザー、ボランティアは、公民館で活動する大正琴の愛好者のグループである。

「大正琴教室」に参加する児童生徒は小学1年生から6年生まで、概ね20人程度で、女子が多いとのことである。なお、安全管理員のKJさんには報償として一回当たり千円が支給されている。

2. ふれあい教室とのかかわり

KJさんには、すでに就職されている女子と大学生の男子の二人のお子さんがいらっしゃるが、かつて子どもさんが小学生の時にPTA役員をされていたこともあり、平成12年度から若狭小学校において「教育相談支援員」として週3回不登校児童の相談等に当たってきた。

平成18年度から那覇市において「放課後子ども教室」が開始されたことに伴い、若狭小学校からの要請を受けて、平成19年度から安全管理員として当該活動に参加するようになった。

KJさんは、安全管理員として子ども達と触れ合ったり、大会に引率する中で自身も大正琴に親しむようになり、とても楽しいと言う。

3. PTAや先生の協力を期待

KJさんの現在の悩みは、子どもたちの大正琴に対する技能レベルの違いに対応した指導をどのようにしていったら良いかといったことである。参加する子どもたちに学年の違いや経験の差が生じているために、同じ場所で、同じ時間に教える時間配分等に苦労しているとのことである。また、金曜日のわずか1時間程度の活動では満足できない子どもたちも多い。そのような子どもたちには毎週土曜日に公民館で学習アドバイザーらが主催する講習会に参加するよう勧めているとのことである。さらに、KJさんは子どもたちの中には、学習塾や他のお稽古ごとのため、途中で帰る子どもいたりして、今の子どもたちは忙しすぎて可愛そうだと思うことがあると言う。

KJさんが「ふれあい教室」に参加した当初は、教員が協力してくれていたが、今は、ほとんど接点がないし、PTAも動いていない。もっと教員もPTAも「ふれあい教室」に関心を持ってもらい、参加してほしいと言う。

4. 聞取り者の感想

KJさんは、平成12年から若狭小学校で「教育相談支援員」を務めていたことから、「ふれあい教室」が始められた時に「安全管理員」として白羽の矢が立ったようである。

活動に参加する中でKJさんは、当初は先生も協力してくれていたが、最近は先生の関心や協力も少ないように感じている。時には先生にも「こどもクラブ」に足を運んでもらい子どもたちの様子や活動を見てもらいたいと望んでいる。

今日、社会のあらゆる分野で合理化や分業化が進み教員についても例外ではなく多忙と指摘されている。校内で行われているこどもクラブについても、ともすれば「あれはこどもクラブの活動だから」ということで、その指導者に任せてしまい足が遠のいてしまう気持ちは理解できる。しかし、時には「こどもクラブ」にも足を運んで子どもたちの様子を観察したり、交流することによって、子どもたちとの信頼関係が深まったり、日頃教室では見ることができない子どもの側面が発見できるなど、学級経営の上でプラスになることも多いのではないか。

子どもたちに対する指導は、大正琴の愛好家のグループである「学習アドバイザー」とボランティアが当たることになっているが、限られた指導者の中で、子どもたちの経験や年齢に伴う技能差に対応した指導をどのようにしたら良いのか悩みつつ、「安全管理員」であるKJさん自身も大正琴を始め、指導の一端を担うようになっている。そして、関心や到達度が高い子どもたちには、公民館で行われている大正琴の愛好者の活動に参加するよう促していると言う。

「ふれあい教室」で初めて大正琴に触れた子どもたちが、これに興味を持って自ら愛好者のグループ活動に参加していることは興味深い。もとより明治時代には「5育」と言って、「食育」「知育」「体育」「才育」「徳育」が重視された。そのような意味で「ふれあい教室」がキッカケとなって公民館で活動する愛好者のグループに参加するのは、一つの「才育」への誘導であり、「徳育」や「食育」とともに社会教育が担う重要な分野であろう。

（結城光夫）

ボランティアとして地域で活躍

STさん　　69歳

1. 活動の現況

STさんは、現在「若狭小学校ふれあい教室」において、毎週水曜日に開かれている「昔遊び」をボランティアとして指導している。昔遊びの内容は、竹馬、竹トンボ、コマまわし、剣玉、割り箸鉄砲、お手玉、おはじき、綾取り、折り紙などに加え、沖縄ならではのアダンやクバ葉っぱを用いたクラフトや松ぼっくりのリース・ツリーづくり、ダンボールでのホバークラフトなど、多岐にわっている。

活動中にも子どもたちは、下駄箱の上に乗ったり、教室内を走り回ったりする時もあるが、学習アドバイザー、安全管理員とともに安全に注意は払うようにしているが、できるだけ子どもたちには、のびのびと遊ばせてやりたいと思い、必要以上に干渉しないようにしているとのことである。なお、ボランティアのSTさんには報償として一回当たり千円が支給されている。

2. 子ども放課後教室とのかかわり

STさんには、すでに成人された2人のお子さんがいらっしゃるが、今はご主人との2人暮らしである。数年前にご主人のお母さんが亡くなられ、心の中にポッカリと穴が空いたようになったことから、さまざまな学習や活動を始められたそうである。

平成9年から地域の民生委員を務められるかたわら、平成18年度からは、学校からの依頼により「ふれあい教室」でボランティアとして子どもたちの指導に携わるようになった。STさんの学習意欲は高く、これまで「介護予防リーダー養成講座」、「中高年の転倒予防講座」、「認知症サポーター講座」、「高齢者の心の健康講座」、公民館の「パソコン講座」等に参加したほか、毎週2回地域ふれあいディサービスにボランティアとして参加されているなど、STさんの地域における活動は多岐にわたり、年齢を感じさせないほど活発である。

「ふれあい教室」には、地域の民生委員で年間の割り振りを行いボランティアとして参加しているが、ボランティアの方々の中には、介護を必要とする家族がいたり、年老いた親がいて急に都合が悪くなる人もいる場合もあるが民生委員相互が協力して、予定に穴を空けるようなことはないとのことである。

大きな不満ではないが、様々なクラフトを指導している途中で、一部の消耗品が足りなくなる場合もあり、時にはSTさん自身が自己負担しなければならない場合もあるそうである。

3. 聞取り者の感想

前述の通りSTさんの地域における活動は活発である。子どもたちと接するに当たっては、日頃から子どもたちの話によく耳を傾け、子どもたちから教えてもらうという気持ちで臨んでいると言う。現在「ふれあい教室」での活動についても特段の要望もないようであるが、保護者には、挨拶など基本的な生活習慣をしっかりと指導して欲しいという感想を持っている。そして、地域の人たちにもっと子どもたちの放課後活動に関心を持って協力してもらいたいと言う。

合理化や便利さを追求する社会の風潮の中で、子どものしつけや教育も外部の専門機関・団体に委託しようとする傾向が強くなっている。勉強は学校・学習塾に、水泳やサッカーなどはスポーツクラブに。そのような中にあって「地域の人々がもっと協力して欲しい」、「挨拶は保護者が教えて欲しい」と言うSTさんの指摘に、我々はもう一度耳を傾けるべきではなかろうか。

（結城光夫）